

第二十一回

日本電子音楽協会

定期演奏会

# 詠像詩

大久保 雅基

「sd.mod.live」

(Snare drum + Video)

スネアドラム 関聡

佐藤 亜矢子

「軋む、彩る」

(Dance + Electroacoustic)

ダンス 原 千夏

土屋 雄

「拡張されたピアノのための映像」

ピアノ 川村 恵里佳

仲井 朋子

「Toukamori-Inari」  
(Multi-channel)

林 恭平

「Iris Mugen Sky」  
(Electroacoustic)

渡辺 愛

「Daydream」

(Electroacoustic + Video)

アニメーション 宮崎 しずか

2018年3月6日(火)

19時開演(18時30分開場)

浦安音楽ホール ハーモニーホール

入場料 2,500円

主催 日本電子音楽協会(JSEM)  
お問い合わせ 日本電子音楽協会事務局  
info-jsem@jsem.sakura.ne.jp



# 第21回日本電子音楽協会定期演奏会

## 「詠像詩」

今や甚に音楽は溢れかえっています。映像や、詩も同様に人の手によって人のために作られ続けています。ネットワークが求める作品形式のフォーマットにさえ準じていれば、誰でも手軽にそれらを「公開」できるようにもなりました。もはやそれらこそが日常的な意味での「音楽」や「詩」や「映像」を形作っているかのようでもあります。

しかし、こうした時代にもう一度あらためて音楽、詩、映像の持つ芸術的な特性を見つめ直すことはできないでしょうか。ネットワークや記録メディアを介した情報の伝達速度は速く、それらは一瞬で私たちに「分かったような感覚」にさせますが、一方でそうしたフォーマットからこぼれ落ちている表現をいっそう見えにくくしているのかもしれない。

音楽とは何でしょうか。詩とは、映像とは何でしょうか。

私たちは日常でそれらに多く触れていますし、職気にその役割をイメージすることもできます。しかし、それらは既に分かりきったものなのでしょう。SNSなどのソーシャルメディアの登場で、新たに気づかされた感覚があるとすれば、人にとって「現在」を感じるという行為は極めて重要な要素の1つでありそうだ、ということかもしれません。そして人には、そのための識別感覚はかなり鋭く備わっているのではないか、ということも様々な局面で実感されています。

今回、JSEM定期演奏会で掲げられているテーマは「詠像詩」です。「像(image,statue,figure,portrait...)」と「詩(詩情/poetic)」というキーワードを含んだ造語ですが、「詠(歌う、唱える)」はまさに作品がその場で生成される様を含んでいます。音楽や、映像や、詩が本来我々にとって何ものであるのか。どうあり得る(あり得た)のか。記録メディアのフォーマットを前提とせず、そこからこぼれ落ちるものにも目を向け、舞台上で生成される「現在性」に立ち会うこと。もはやそこに約束された確かな道はないのだとしても、「詠像詩」をテーマに集まった新作達と共に、JSEMはこの難題を見つめ直したいと思います。

### ■ 出演者

#### 大久保 雅基



1988年宮城県仙台市生まれ。アコースティック楽器や演奏行為にテクノロジーを組み込み、生演奏にデジタルの所作を融合させた作品を制作している。洗足学園音楽大学 音楽・音響デザインコースを成績優秀者として卒業。情報科学芸術大学院大学[AMAS]メディア表現研究科 修士課程修了。名古屋芸術大学デザイン学部、愛知淑徳大学人間情報学部非常勤講師。日本電子音楽協会会員。先端芸術音楽創作学会会員。

#### 佐藤 亜矢子

東京藝術大学大学院博士後期課程在籍。主に電子音響音楽/アコースティック音楽の分野で国内外にて活動。FUTURA, NYCEMF, SMC, ICMC等入選多数。Destellos Competition佳作(2013), Prix Presque Rien第三位(2013), 東京藝術大学大学院アカンサス音楽賞(2014)等受賞。文化庁新進芸術家海外研修制度短期研修員(2017)、公益財団法人かけはし芸術文化振興財団奨学生(2017)。



#### 土屋 雄



東京音楽大学大学院作曲科修士課程修了。またIRCAM(フランス国立音響現代音楽研究所)でコンピュータ音楽を学ぶ。第13回現音作曲新人賞、第66回日本音楽コンクール作曲部門に入選。2008年度ヴァレンティノブッキ国際作曲賞(ローマ) 特別表彰を受賞。また細川俊夫氏のオペラで電子音響を担当する他、多くの作曲家の作品制作にも携わっている。近著:「The OM Composer's Book 3 Dialogue with OpenMusic in the process of composing Nothing that is not there and the Nothing that is」現在、東京音楽大学 准教授。

#### 仲井 朋子



音響が生成される瞬間への関心からコンピュータを介したパフォーマンスな作品に注目し、主に器楽とライブ・コンピュータ・システムのための作品を制作してきた。近作はジャンルを横断する作品が多く、青森EARTH2014(青森県立美術館)でのインスタレーション、マテリアライズン展Ⅲ(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA)での展示作品などがある。国立音楽大学、同大学大学院修了。東京藝術大学、洗足学園音楽大学各講師。

#### 林 恭平

兵庫県三田市にて過ごす。大阪芸術大学大学院修了。10代よりミュージック・コンクレートの作品に没頭。小規模な電子音響音楽を制作し続けている。また、絵画や映像制作にも動かし、表現を模索しつづけている。尊敬する人物は夏目漱石。2015年度ルイジ・ブルッロ電子音楽賞グランプリ受賞 2016、2017年度ルイジ・ブルッロ電子音楽賞審査員の1人として選出される。2013年度国立国際美術館「Japan Electroacoustic Music Concert」企画、出演。



#### 渡辺 愛



フィールドレコーディングを含む電子音響音楽や器楽を中心に活動する。東京音楽大学を経て渡仏、パリ国立地方音楽院修了。東京藝術大学大学院博士後期課程修了。リュック・フェラーリ研究で博士号を取得(学術)。ラジオ放送や音楽祭出演、国際コンクール受賞など国内外で活躍する。尚美学園大学・昭和音楽大学各講師。日本電子音楽協会理事。先端芸術音楽創作学会会員。

<http://aiwatanabe.tumblr.com>

2018年 3月6日(火)

19時開演(18時30分開場)

浦安音楽ホール ハーモニーホール

〒279-0012 千葉県浦安市入船一丁目6番1号

<http://www.urayasu-concerthall.jp/>

入場料 2,500円

主催:日本電子音楽協会(JSEM) <http://jsem.sakura.ne.jp/>

お問合せ:日本電子音楽協会事務局 [info-jsem@jsem.sakura.ne.jp](mailto:info-jsem@jsem.sakura.ne.jp)

#### アクセス

JR京葉線・武蔵野線  
新浦安駅南口から徒歩1分

専用駐車場はございません。  
ご来館の際は、  
公共交通機関の  
ご利用をお願いします。





第二十一回  
定期演奏会

日本電子音楽協会

# 詠像詩

2018年3月6日(火)

19時開演(18時30分開場)

浦安音楽ホール ハーモニーホール

今や巷に音楽は溢れかえっています。映像や、詩も同様に人の手によって人のために作られ続けています。ネットワークが求める作品形式のフォーマットにさえ準じていれば、誰でも手軽にそれらを「公開」できるようにもなりました。もはやそれらこそが日常的な意味での「音楽」や「詩」や「映像」を形作っているかのようでもあります。

しかし、こうした時代にもう一度あらためて音楽、詩、映像の持つ芸術的な特性を見つめ直すことはできないでしょうか。ネットワークや記録メディアを介した情報の伝達の速度は速く、それらは一瞬で私たちを“分かったような感覚”にさせますが、一方でそうしたフォーマットからこぼれ落ちている表現をいっそう見えにくくしているのかもしれない。

音楽とは何でしょうか。詩とは、映像とは何でしょうか。

私たちは日常でそれらに多く触れていますし、臆気にその役割をイメージすることもできます。しかし、それらは既に分かりきったものなののでしょうか。SNSなどのソーシャルメディアの登場で、新たに気づかされた感覚があるとすれば、人にとって「現在」を感じるという行為は極めて重要な要素の1つでありそうだと、ということかもしれません。そして人には、そのための識別感覚はかなり鋭く備わっているのではないかと、ということも様々な局面で実感されています。

今回、JSEM定期演奏会で掲げられているテーマは「詠像詩」です。「像(image, statue, figure, portrait...)」と「詩(詩情/poetic)」というキーワードを含んだ造語ですが、「詠(歌う、唱える)」はまさに作品がその場で生成される様を含んでいます。音楽や、映像や、詩が本来我々にとって何ものであるのか。どうあり得る(あり得た)のか。記録メディアのフォーマットを前提とせず、そこからこぼれ落ちるものにも目を向け、舞台上で生成される「現在性」に立ち会うこと。もはやそこに約束された確かな道はないのだとしても、「詠像詩」をテーマに集まった新作連と共に、JSEMはこの難題を見つめ直したいと思います。

第21回電子音楽協会定期演奏会

## 「詠像詩」

プログラム

林 恭平  
Iris Mugen Sky  
(Electroacoustic)

大久保 雅基  
sd.mod.live  
(Snare drum + Video)  
スネアドラム 関 聡

佐藤 亜矢子  
軋む、彩る  
(Dance + Electroacoustic)  
ダンス 原 千夏

渡辺 愛  
Daydream  
(Electroacoustic + Video)  
アニメーション 宮崎 しずか

仲井 朋子  
Toukamori-Inari  
(Multi-channel audio)

土屋 雄  
拡張されたピアノのための映像  
ピアノ 川村 恵里佳



# 佐藤 亜矢子 SATO Ayako

## 軋む、彩る (2018 初演)

(Dance + Electroacoustic)

ダンス 原 千夏

アコースティック・ミュージックと、コンテンポラリー・ダンスによる作品。南欧の小さな島で聞く自然の「詠 chant」を主な素材に、ダンサーのしなやかな身体という「像 figure」を借りて、破片を寄せ集めたモザイクのような「詩 poetics」を形成する。

夏の終わり。過ぎ去ったアドリア海の青。入り組んだ海岸は山々の緑にそっと抱かれているよう。煉瓦色の屋根がずらりと並ぶ。複雑な地形が生み出す独特な反響に包まれながら、小舟が風に揺れる度にぶつかり合い、ロープが軋むのを聞く。

1968年8月、この町で初めて芸術家の国際会議が開催された。欧州を中心に様々な国の画家が集い、彼らはモザイクを製作する。そこには「彼」も居た。普段は音を材料に創作を行う「彼」も、モザイク作りに加わった。たくさんの小さなタイルが集まることでimageが現れ、彩りが現れ、ほとんど何でもなかった細かな欠片から一つの絵が、「作品」が、形作られてゆく。それはきっと、音の断片を繋ぎ合わせて漁港の夜明けの情景を描いた「彼」の「作品」への道標となったはずだ。

半世紀が経った。蝉の合唱や、鶴の鳴き声や、穏やかな海は、ひよっとすると多くはあの頃のままで、でも多くが変わってしまったかもしれない。繰り返される日常の蓄積が歴史となり、文化となり、軋みや彩りを織りなす。町の中には「彼」の名が刻まれたモザイクが記念碑となって佇み、これからも些細な破片を積み重ねてゆく日々を静かに眺め、あるいは耳を傾け続けるだろう。



作曲: 佐藤 亜矢子

東京藝術大学大学院博士後期課程在籍。日常の雑音・生活の音・物音等の録音物を素材とし、それらが孕む色・香り・質感・意味に向き合い、時に断絶を強い、咀嚼・解釈・脚色し、具象と抽象の境界でせめぎ合う電子音響音楽を構築する。FUTURA, NYCEMF, SMC, ICMC, Banc d'Essai (Ina-GRM) 等多数入選し、10数ヶ国で作品上演。International Electroacoustic Music Young Composers Awards 第三位 (台湾, 2012)、Destellos Competition 佳作 (アルゼンチン, 2013)、Prix Presque Rien 第三位 (フランス, 2013)、東京藝術大学大学院アカンサス音楽賞 (2014) 等受賞。文化庁新進芸術家海外研修制度短期研修員 (2017)、公益財団法人かけはし芸術文化振興財団奨学生 (2017)。http://asiajaco.com



ダンス: 原 千夏

1991年生長崎県出身。東京藝術大学大学院先端芸術表現専攻在籍。身体表現やリサーチワーク、写真など、ジャンルの垣根をこえた表現を模索する。2011年より、即興パフォーマンスを中心とした活動を開始。白神ももこ振付「春の祭典」(東京芸術劇場プレイハウス, 2014) メインキャストや、東京藝術大学×エコール・デ・ポザール国際共同プロジェクト「私と自然」(越後妻有 大地の芸術祭, 2015) にてパフォーマンスを行う。武蔵野美術大学芸術文化学科を首席卒業。卒業論文「白磁製マリア観音像—長崎県内における分布と造形的特徴—」(優秀賞, 2015)。写真作品を「fotofever」(パリ, 2016)、「バルセロナ国際アートフェア」(スペイン, 2016) などに出展。



渡辺 愛 WATANABE Ai

## Daydream

(Electroacoustic + Video)

アニメーション 宮崎 しずか

リュック・フェラーリの録音アーカイブを使って制作するプロジェクト「プレスク・リヤン賞」のための作品で、素材の多くにプレスク・リヤン協会が管理しているフェラーリの音源を用いている。テキストもフェラーリによる詩である。2017年9月7日、名古屋市立大学でのJSEM特別コンサートにて初演した曲がベースとなっているが、映像作品としての本格的な上演は今夜が初めてとなる。以下は使用した2つの詩の日本語訳である。夢にでてきたイメージのようにも、音響についての考察のようにもみえる。

\*\*

壊れた車輪に  
永遠の吐き出された夜に  
失われた腕に  
そして、悲鳴に  
くちづけを思わせる音が必要だ。  
ガラスの摩擦に  
逃げゆく雲に  
樹の長さの目覚めと傷に  
貝殻の形をしたくちづけが必要だ。  
そして  
私は舌を突き刺す針が欲しい。

(1951年10月)

道は木々の影を探す  
そして私は道を探す  
しかし太陽は子供たちが押しこむ雲に隠れてしまう  
やがて道は逃げ、私の足は瓶のように壊れてしまう  
子供たちは太陽の髪を引っ張って遊ぶ  
道は私の足跡をたどり  
子供たちは手を動かして笑う  
なぜ笑うのか  
いつ飛べるのかと  
太陽は言う  
そして子供たちは手を伸ばして飛んでいく

(1951年11月22日)

\*\*

最後に、作品に新たな息吹を吹き込む映像を作ってくださった宮崎しずか氏、明鏡・英訳のJean-Philippe Plazas氏、そしてフェラーリの音源を管理するAssociation Presque Rien (プレスク・リヤン協会)とBrunhild Ferrari氏に御礼を申し上げます。



作曲:渡辺 愛

フィールドレコーディングを含む電子音響音楽や楽器を中心に活動する。東京音楽大学を経て渡仏、パリ国立地方音楽院修了。東京藝術大学大学院博士後期課程修了。リュック・フェラーリ研究で博士号を取得(学術)。第一回東京音楽大学学長賞(日本)・TEM主催JAPAN2011受賞(イタリア)・ピエール・シェフェール賞セミファイナリスト(フランス)、第三回プレスク・リヤン賞ファイナリスト(フランス)、国営ラジオでの放送(France Musique)、FAF(富士電子音響芸術祭)・FUTURA(フランス)・NIT(スペイン)等音楽祭での上演など国内外で評価を得る。大支良英や七尾猿人らとともにアジアの音楽家とセッションしたアルバム『Asian Meeting Recordings #1』が発売中。尚美学園大学・昭和音楽大学各講師。日本電子音楽協会理事。先端芸術音楽創作学会会員。  
<http://aiwatanabe.tumblr.com>



アニメーション:宮崎 しずか

京都生まれ。京都精華大学、カリフォルニア美術大学で彫刻と服飾を学び、映画関係の会社で勤務後、東京藝術大学大学院映像研究科で映像を学ぶ。代表作は、野外でコマ撮りした作品「キドモドキ」など。また商業的な方面では、プロジェクションマッピング映像やインタラクティブ映像などを制作している。現在、比治山大学短期大学部美術科講師。日本アニメーション協会会員。





仲井 朋子 NAKAI Tomoko

Toukamori-Inari (2018 初演)  
(Multi-channel audio)

世田谷の稲荷森稲荷神社の例大祭は、巨大な太鼓車が神輿渡御を先導するお祭りで毎年秋に行われている。一昨年の10月、それとは知らず町が揺らくほどの太鼓の音に驚いて、レコーダーを片手に音の所在をつきとめた。この作品は、その際に記録された渡御的一幕を音楽語法で読み直し、現実の事象と音楽との間を作品にすることを試みている。稲荷森稲荷神社はその昔、「雨や雪が降っても傘はいらないほどの古木がうっそうと茂り、往来する人や馬方たちの雨宿り、休憩場所として使われた」と言われている。神社に残されている謂われを、記録されたサウンドの解析情報を元に想像し、空間に立ち上がらせる。元となる渡御の様子は特別な編集はされておらず、ただ一途に詠まれていく。稲荷森稲荷という名称もまた「とうかもけいなり」と、同じ読みを繰り返さない。

作曲: 仲井 朋子

神奈川県生まれ、作曲家。音響が生成される瞬間への関心から、コンピュータを介したパフォーマンスな作品に注目し、主に器楽とライブ・コンピュータ・システムのための作品を制作してきた。近作は、青森EARTH2014(青森県立美術館)でのインスタレーション、マテリアライジング展Ⅲ(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA)での展示作品、またOPEN SITE 2016-2017(トーキョーワンダーサイト)にてDecibel New Music Ensembleと2日に渡るコンサートを企画、新作公演を行うなど様々な領域で活動している。国立音楽大学大学院音楽研究科終了。現在、東京藝術大学芸術情報センター、洗足学園音楽大学各講師。

tomokonakai.com





# 土屋 雄 TSUCHIYA Takeshi

## 拡張されたピアノのための映像

ピアノ 川村 恵里佳

ピアノと電子音響のための作品。タイトルの「映像」は近代音楽等の音画的手法を意味するものではない。この作品はピアノ音楽、或いは楽器が「表現される/されてきたもの」、つまり伝統への拡張のための再考と試みである。奏者＝人の身体性を含みより繊細な表現へあらためて目を向け、それらの聴取の可能性に対して先端技術が如何に反映されるかが主題である。ピアノと電子音響パートはフランスのIRCAMで研究開発されたスコアフォローシステム Antescofoにより、非常に細かい演奏者の表現一つ一つに対して完全に追従し、すべてがリアルタイムで処理されている。曲全体は標題を伴った3つの小品から構成されており、本来は連続しての演奏を想定しているが、各々の曲のみ独立しての演奏も可能である。(通常はIからIIはattaccaで演奏される)

I - 動く標的 ～もうひとつのIn C～

II - 流れて四方に ～宇宙と化転手～

III - 響きの戯れ ～「命」の確立への至上命令放棄～

作曲:土屋 雄

東京音楽大学大学院作曲科修士課程修了。作曲を湯浅鉄二、池辺晋一郎、西村朗の各氏に、指揮を三石積一氏に、オンドマルトノを原田前氏に師事。またIRCAM(フランス国立音響現代音楽研究所)で先端芸術表象と電子音響音楽を学ぶ。第13回現音作曲新人賞、第66回日本音楽コンクール作曲部門に入選。2008年度ヴァレンチノフスキ国際作曲賞(ローマ)特別表彰を受賞。日本音楽集団、CDMCの委嘱作品の他、主要作品はNHK-FM等でも紹介されている。また電子音楽分野では自作品の他、西村朗氏の作品、細川俊夫氏のオペラで電子音響を担当する他、多くの作曲家の作品制作にも携わっている。著書: The OM Composer's Book vol.3 ~ Dialogue with OpenMusic in the process of composing Nothing that is not there and the Nothing that is [Editions DELATOUR(フランス)]

現在、東京音楽大学及び大学院 准教授。



ピアノ: 川村 恵里佳

東京音楽大学卒業、同大学院修士課程修了。在学中、レインボウ21・サントリーホールデビューコンサートに出演。第11回現代音楽演奏コンクール「競奏XI」にて、審査委員特別奨励賞を受賞。現代音楽の演奏に積極的に取り組み、新曲初演を含む数々のプロジェクトに参加。ハニヤン現代音楽祭(ノウル)、ウィーンモダン音楽祭に招聘される。播木枝赤子、石井克典、土田英介、山淵智、野平一郎、河内純の各氏に師事。東京音楽大学非常勤研究員。





第21回日本電子音楽協会定期演奏会

## 「詠像詩」

主催：日本電子音楽協会(JSEM)

企画制作：高野 大夢 福島 諭 由雄 正恒 渡辺 愛

音響：中原 稟(ルフトワーク)

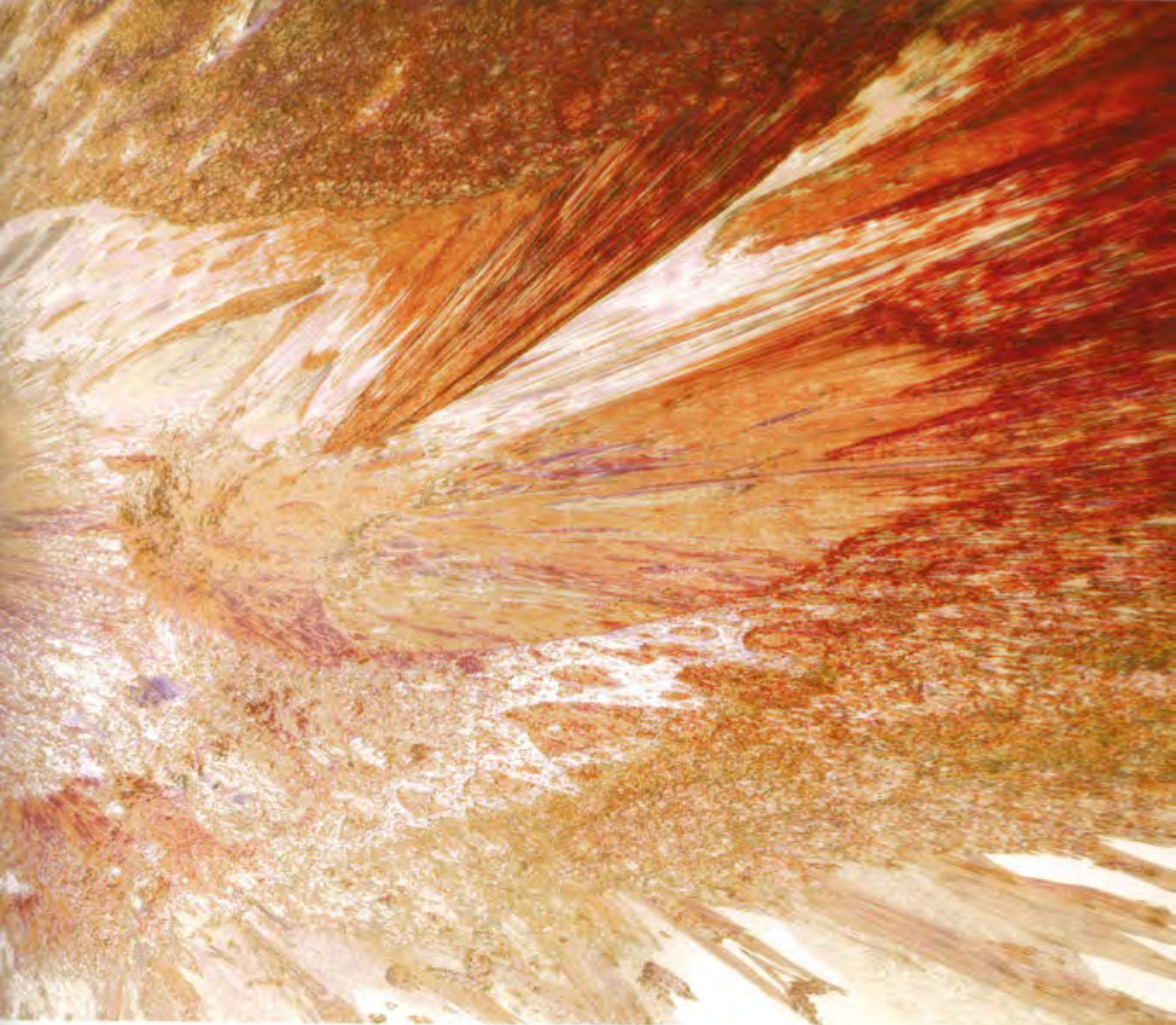
ステージスタッフ：王 茂盛(昭和音楽大学大学院 修士2年) 居垣 大地(昭和音楽大学 学部3年)

受付スタッフ：菅原 瑞貴(昭和音楽大学 学部2年) 薄井 暁(昭和音楽大学 短大1年)

映像記録：足立 美緒(東京藝術大学大学院 修士3年)

フライヤー・パンフレットデザイン：小阪 淳





### 新入会員随時募集

入会には正会員一名の推薦が必要です。

活動歴、作品歴、推薦者の署名入りの  
入会申込書を事務局宛にご送付ください。

詳しくはwebをご覧ください。

<http://jsem.sakura.ne.jp/>





日本電子音楽協会

